

1. 指導目標

- 様々なジャンルの本に関心をもち、読書への意欲をもとうとする。 (関心・意欲・態度)
- 自分が薦めたい本の魅力を、情景描写などの表現方法を工夫して発表する。 (書くこと カ)
- 自分が薦めたい本の魅力を、情景描写を工夫したりキャッチコピーを作ったりしながらまとめる。 (書くこと オ)
- 筆者の心の動きと場面の情景を叙述に即して読む。 (読むこと エ)
- 本を紹介するために、表現の工夫に注目して読む。 (読むこと カ)
- 筆者の情景描写における比喩的な表現などに注目し、その効果を理解し味わうことが出来る。 (言語事項 (1) イ(ケ))

2. 単元名 読書の世界を深めよう

3. 教材名 「森へ」「本は友達」

4. 単元について

(1) 児童の実態

<「読む」単元の学習について>

1学期の第1単元である「本に親しみ自分と対話しよう」において、子どもたちは物語文『カレーライス』を通して、人物の心情の変化を自分自身と置き換えて考えたり、叙述を根拠にしたりしながら読み取る学習をしてきている。具体的には、

- ・教材文の中から、登場人物の心情が大きく揺れ動いた場面に焦点化する。
- ・それらの場面について設定された課題について、自分自身と置き換えたり叙述をもとにしたりしながら自分の考えを深める。
- ・自ら課題を設定し、その課題に対して、自分自身と置き換えたり叙述をもとにしたりしながら自分の考えを深める。

といった学習の流れを経験してきている。また、それぞれの学習場面において、ペア会話、グループ討論といった場を設定し、自分の考えを主張したり、自分の考えと他の考えを比較し見直したりする活動も経験してきている。その際に、聞き手に効果的に自分の考えを主張する1つの手段として、“根拠を明確にする”ことを指導してきている。

<表現活動について>

最高学年となり、様々な場面において自己表現する場が増えてきているが、その意欲には個人差がある。また、朝の会の新聞スピーチや帰りの会の一言振り返りなどにおいても、内容にまとまりがなかったり、話し方に自信がなかったりといった課題が見られた。

そこで、子どもたちの表現活動への意欲の向上のために、楽しく表現する場を設定するように心掛けてきた。具体的には、なぎさタイムにおける言語活動の時間を利用して、落語に取り組んでいる。短い落語を6人で分担して覚え、感情をこめて表現する練習を繰り返し、6-2寄席にむけて意欲的に取り組んでいる。今後は、他の落語を少人数で表現するなどの活動にも取り組ませていきたい。

<読書活動について>

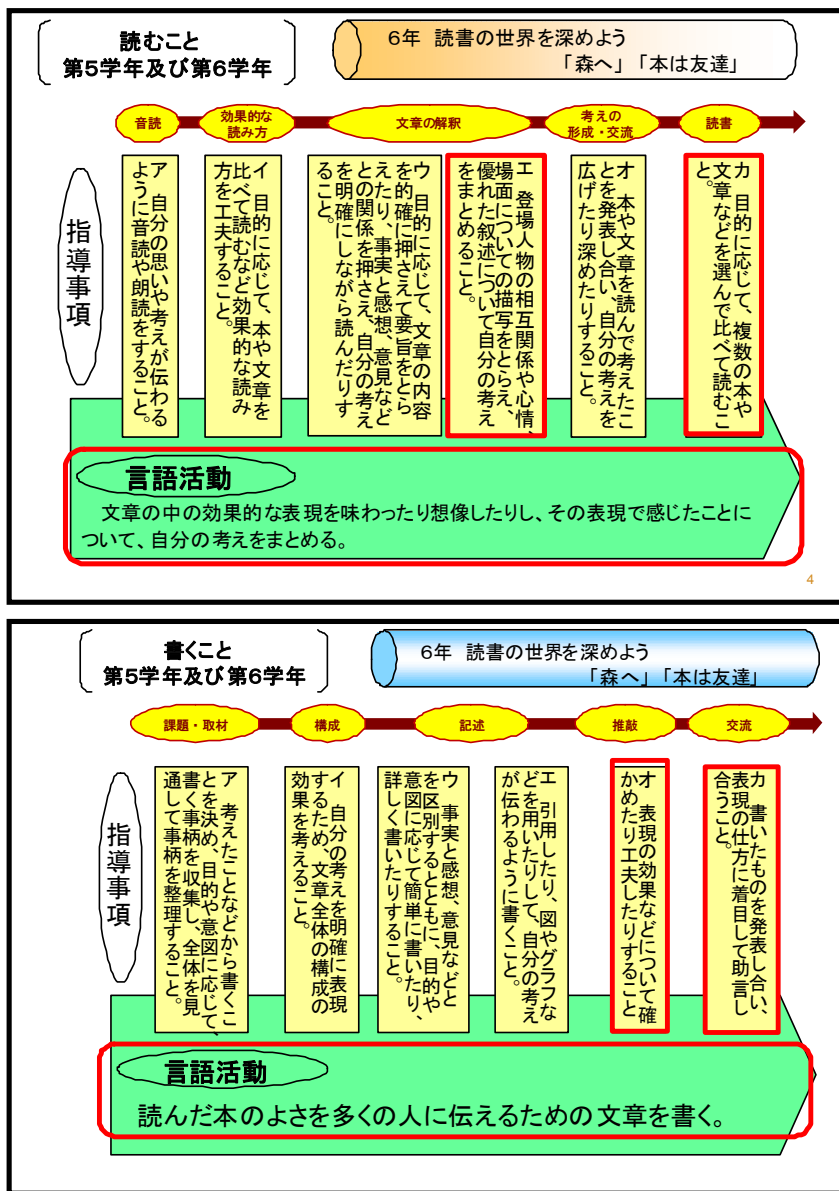
学級の「本係り」の活動として、お勧めの本を学級全体に向けて紹介するなど、読書の楽しさを多くの友達に広げるための活動に取り組んでいる。また、紹介された本を熱心に読む姿も多くみられる。

その反面、読書量については個人差が大きい。読書量の少ない子どもたちに読書の良さに気付かせ、積極的に読書に取り組もうとする意識を育んでいくことが今後の課題である。

(2) 教材文について

「森へ」は筆者自身が自然の中に身を置いて感じたり考えたりしたことを、写真と文章で構成した作品である。筆者は感性を研ぎ澄まし、森と共生し、豊かな心でこの一編を書いている。作品の中では、五感（特に、視覚・聴覚・嗅覚・触覚）が効果的に表現されており、読者の想像力が深まりやすくなっている。そのため、いろいろな感覚を働かせて読むことで、生き生きした読書の世界が生まれるだろうと考えられる。

(3) 活用力を育むために



<導入の工夫について>

本単元における活用力を、「教材文『森へ』の学習で身に着けた表現の工夫を自分の“本の紹介文”に活用する力」ととらえることとする。そこで、本単元の導入においては、“本係り”の子どもによる本の紹介活動を取り入れたい。その上で、より効果的な本の紹介文をつくるために、様々な表現の工夫を学習することを子どもたちと共に確認していくこととする。実際の本の紹介活動を取り入れ、本単元のゴールを子どもたちに意識させることで、読書発表会に対する子どもたちの意欲や、自分の本の紹介文に様々な表現活動を取り入れようとする意欲が高まっていくのではないかと考えたからである。

<筆者の心の動きと場面の情景を叙述に即して読む活動について>

前述したように、「森へ」は場面の情景や筆者の心の動きを、筆者自身の五感を通じた表現や、比喩、擬態語、擬声語、擬人化、倒置法など様々な表現方法の工夫によって効果的に表現されてい

る。場面の情景や心の動きを効果的に伝える表現方法を丁寧に扱い、その効果を確認していくことで、表現方法を工夫しようとする意識の向上につなげていきたい。

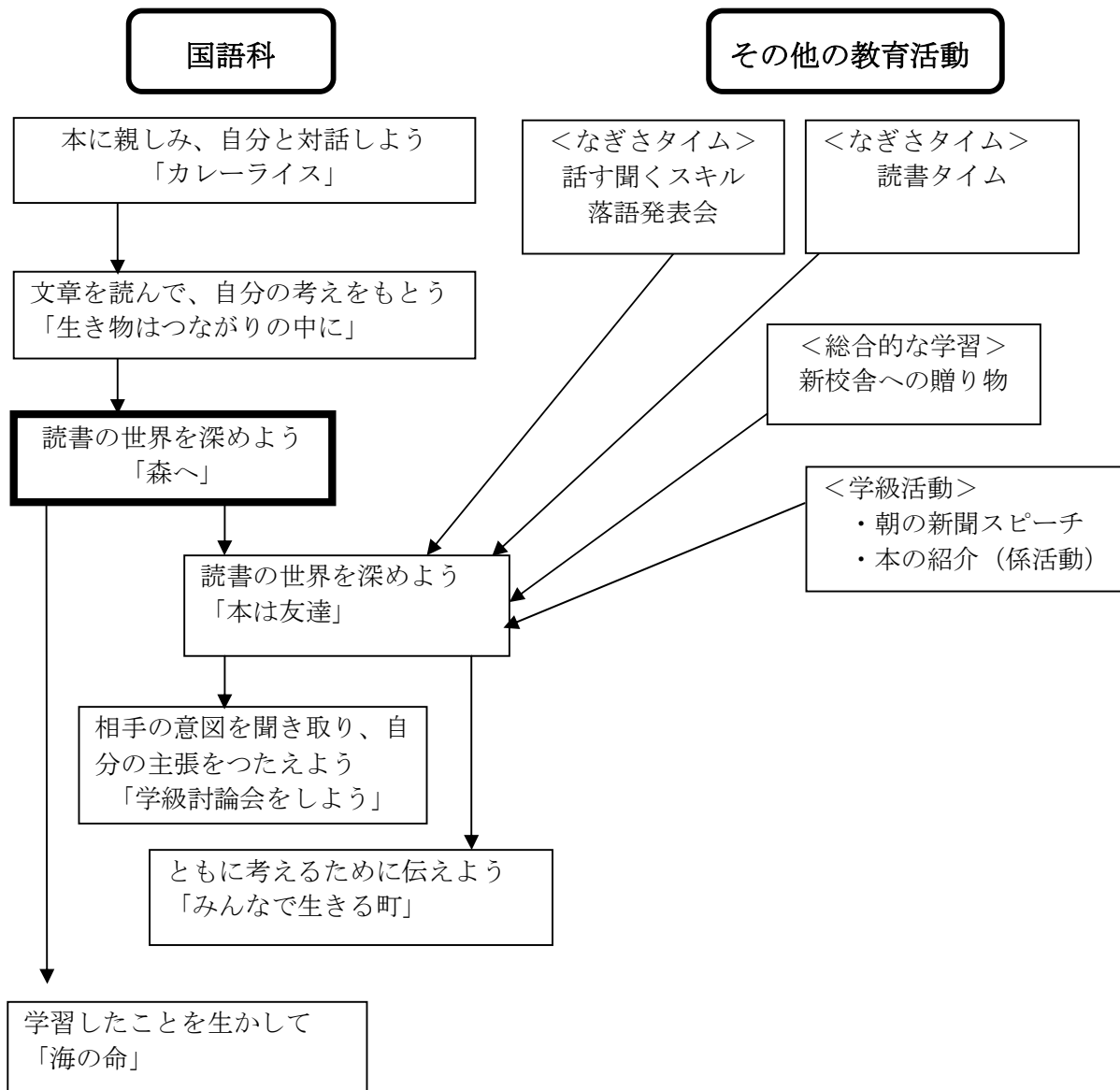
<読書発表会にむけての活動について>

子どもたちは3年生の時に本の帯づくりを通して本を紹介する学習活動を経験しているが、紹介文を書く学習は初めてである。そこで子どもたちが見通しを持って学習に取り組めるようにするために、紹介文を書くコツについて考える場を設定する。具体的には、2つの紹介文を比較しながらそれぞれの長短について考え、話し合うことで、紹介文を作る上での“コツ”をまとめていきたい。そうすることで、紹介文について具体的なイメージを持つことができ、その後の学習活動により意欲的に取り組めるのではないかと考えたからである。

また、子どもたちが自分や友人の紹介文について評価し合い、お互いに高め合える場として中間発表の場を設定する。発表方法のみならず、表現の工夫やキャッチコピーの工夫など様々な視点で評価し合い、その後の学習活動に活かしていけるようにしていく。また、図書館司書の先生にも参加していただき、アドバイスをしてもらうことで、子どもたちの表現の工夫についての理解の向上を図っていきたい。

本単元の最後には、他学級の友達を対象にした読書発表会を計画している。導入時において本単元の学習のゴールとして子どもたちに知らせることで、子どもたちの本単元に対する学習意欲が高まり、さらには、学級だけではなく学年全体で交流することで、学び合いが深まり、お互いに高まり合う姿が見られるのではないかと考えたからである。

(4) 本単元との関連



5. 本時について（二次中第1時）

(1) 目標

- ・2例の紹介文を比較することで、紹介文を書くためのコツについて考える。

(読む カ)

(2) 準備

ワークシート

(3) 展開

	配時	学習活動	評価 支援 (○) と留意点 (◆)
つかむ	5	1. 本時のめあてを確認する。 ・紹介文ってどんなものなのかな？ ・聞いた人が読みたくなるような紹介文を作りたいな。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">本の紹介文を書くためのコツをつかもう。</div>	◆紹介文作りへの意欲を持たせるために、学習の見通しを確認する。 ◆紹介文を固定的にとらえないよう、一つの例として提示する。
深める	25	2. 2つの紹介文の例を読み比べ、それぞれの長所や短所について考える。 ・Bのキャッチコピーを見るだけで興味がわいてくるね。 ・Aの最後の文章が呼び掛けになっていていいと思うよ。 ・Aには擬人化や倒置法があるよ。 ・Bには擬声語が使われている。 ・Bはあらすじだけだから紹介する感じがしないね。 ・A・Bともに写真(挿絵)があるのがいいね。 3. それぞれの長所や短所について話し合う。 ・Bのキャッチコピーの方が見ただけで読みたくなるよ。→キャッチコピーを工夫しよう。(コツ①) ・文末が問いかけになっていると、気になって読みたくなるね。 ・擬人化、倒置法、擬声語などの工夫があるとイメージがわきやすいね。 ・写真や絵を工夫するともっと伝わりやすくなると思う。	◆双方の長所や短所について比較できるように助言する。 ○表現方法の工夫という視点で考えられない児童には、「森へ」の学習を想起させることで、比喩や擬人化、倒置法などの表現方法の工夫に気づかせる。 ◆「キャッチコピー」という語句について確認する。 ◆それぞれの工夫の効果についても考えさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">紹介文を書くためのコツやその効果について考えている。(読む カ)</div>
まとめる	15	4. 本の紹介文を書くためのコツについてまとめる。 ・キャッチフレーズを考えよう。 ・写真や挿絵を効果的に使おう。 ・文章の表現を工夫しよう。 5. 自分の紹介したい本についての紹介文について考える。 ・どんなキャッチコピーにしようかな？ ・比喩や擬人化など表現を工夫しよう。 ・読みたくなるように、文末を工夫しよう。 ・どの写真(挿絵)をどこに使おうかな？	◆読み取った工夫点が、紹介文を書くためのコツへとつながるようにする。(板書・ワークシート) ○自分の紹介文として具体的に考えられない児童には、キャッチコピー、挿絵など比較的工夫しやすいものから考えるよう助言する。